乳幼児期の絵本場面における母親の演出行動と質問行動の役割

―情緒的な相互行為促進に影響を及ぼす行動様式の検討―

関根　佐也佳*

The role of mother's acting behavior and questioning during picture-book reading in infancy

−An examination of the emotional effect of such behavior on mother–child−

Sayaka SEKINE

abstract

This study examines whether "mother's acting behavior (imitating characters in a picture-book or onomatopoeia) and questioning (questioning the child about a picture-book) promotes the expression of emotions during mother–child interactions. In this study, the participants were 5 mother–child dyads (3 boys and 2 girls). Researchers observed a scene of picture-book reading every month, and calculated rate of appearance of mother–child behaviors. The observation period was from the 6 month since the birth of the child until the 24 month. The "mother's acting behavior" was associated with the rate of the child's interaction with the picture-book, such as touching a picture and non-verbal utterances. Furthermore, questioning was associated with the number of times a child pointed at the book, uttered a meaningful word, or imitated a character from the book. Results show that the mother's acting behavior promoted non-verbal mother–child interaction from the age of 7 months, and questioning promoted verbal communication between mother and child after the child was 11 months old. It is assumed that non-verbal communication between mother and child during infancy encourages positive emotional interaction. Furthermore, it is revealed that mother used behavior properly in association with a degree of child's development.

Keywords：infancy, picture-book reading, emotional interaction, acting behavior, non-verbal communication

1　問題と目的

現在，幼い子どもへの絵本読みは家庭や保育場面などで広く行われており，そこでは様々な物語が展開され，楽しさが共有されていく。主に子どもを絵本の世界に導く読み手は大人である。しかしながら，大人から子どもへの一方向のみで物語が伝わることが絵本読みではない。子どもは絵本読みの中で，大人が発する様々な言動や行動に敏感に反応し，そして絵本を通しての多種多様な大人とのやり取り(相互行為)を行う。これまで，絵本読み場面における大人 (主に母親)と子どもとの相互行為を明らかにしようとした研究は多く存在する。

キーワード：乳児、絵本読み、情緒的な相互行為、演出、非言語的コミュニケーション

＊ お茶の水女子大学大学院博士課程

例えば，日本における絵本読み研究として，過去には，外山 (1989) の研究がある。外山 (1989) は，1 歳 5 ヶ月齢から 1 歳 11 ヶ月齢の子どもとその母親の絵本読み場面の観察を行い，母親の名称づけが子どもとのどのような相互行為の中に生じていくのか，対話のルーティンについての検討を行った。結果，母親は子どもが名称を間違えた時に正しい名称を伝える行動を取ることが見出されることが明らかとなった。さらに，母親のペースで絵本読みが進められていくが，主に子どもが主体の活動として絵本読みが捉えられていることが見出された。また，村瀬・マユー・小椋・山下・Dale (1998) は，子どもの発育は養育者とのやり取りに能動的に参加することでなされるとの観点に立ち，10，15，18，21，24，27 ヶ月児の母子 66 組に対して絵本場面を観察する横断的研究を行った。その結果，子どもが 18 ヶ月齢以降，慣用的ラベリング(一般的に言われている名称)を多く用い始め，それに伴い，母親は子どもから情報を引き出そうとし，また絵本への緻密な情報を与えるようになることを報告した。つまり，母親は子どもの言語的発達に合わせて足場作りを行っている事が見出された。

このように，大人と子どもが絵本を読む行為の中には，様々な相互行為が生じている。これまでの研究では，絵本読みで生じる行動のルーティンの形成や特に子どもの言語発達に焦点を当てた研究が多く存在する特徴がある (Ninio & Bruner, 1978; 石崎, 1996; Karrass & Braungart-Rieker, 2005)。しかしながら，秋田・無藤 (1996)の研究により，近年，絵本読みを行うことの意義について，子どもの言語の発達を重視するだけではなく，親子のふれあいを高めることを重視する親の意見が増加しているこが報告されている。さらに，日本国内の各自治体では，幼い子どもとのふれあいのひとときを持てるように，乳児とその母親との絵本読みを推奨するブックスタート運動が広まっている。このように，今では，低年齢時の絵本読みが親子の情緒的な相互行為の促進に果たす役割に注目が集まっているといえる。

絵本読みが親子の情緒的な相互行為に与える影響を検討した最近の研究として佐藤・内山 (2012) の研究がある。佐藤・内山 (2012) の研究では，絵本共有時間の増加が生後 9 ヶ月齢の子どもとその母親とのやり取りにどのような影響を及ぼすのかが検討され，絵本を共有する時間を増加させた母子において，子どもの感情の共有が促進され，母親は子どもの行動に敏感に反応を示すようになったとの見解が報告された。また，1 歳半，2 歳半，3 歳の子どもを対象に主に共同注視の発達に焦点を当て，母子の絵本場面を調査した菅井 (2012) の研究では，報告された事例の中に指さし以外にも親子が登場人物の模倣を行ってやり取りを楽しむ事例も見られた。さらに関根 (2013) は，生後 6 ヶ月齢から 20 ヶ月齢までの母子絵本読みを縦断的に観察し，母子相互行為の促進に影響を与える行動様式を検討しており，事例から母親による擬音語等を行う演出的行動と質問行動が相互行為の促進に影響を与える可能性が報告された。

以上の研究結果では，絵本を読む行為において親子の情緒的な相互行為が促進されていることが示唆されている。しかしながら，絵本読みにおける親子の楽しいふれあい場面が形成される過程には，どのような行動様式が関係するのか等，実践に関わる言及を行った研究は未だ少ないといえる。本研究では，絵本における親子の情緒的な相互行為がどのような行動様式に影響を受けて展開されていくのかを検討する。特に関根 (2013) にて見出された見解を基に，母親の演出行動と質問行動が具体的に子どものどのような行動様式と関連し合い，相互行為を展開させていくのか，量的側面において検討する。本研究の具体的な目的を下記に定める。

1．絵本場面における母親の演出行動，質問行動が子どものどのような行動様式と関連し合っているのか，各行動の初出現月齢と出現率の算出によって検討する。

2．各月齢における母親の演出行動と質問行動が絵本読み場面の母子相互行為において担う役割について，それぞれの月齢における出現率の算出から比較検討を行う。

本研究結果により，絵本読みを通して低年齢児とその母親との情緒的な相互行為を促進させる要因の一端を示す事ができると想定される。これにより，初めて幼い子どもと絵本を読み始める親や，絵本読みにおける自らの読み方等に不安を抱える親への助力となることが考えられる。

2　対象と方法

2-1. 協力者

協力者は関東圏内に在住の 5 組の母子であった (男児 3 名，女児 2 名 ; A 児 : 男児　第一子，B 児 : 男児　第三子，C 児 : 女児　第一子，D 児 : 男児　第二子，E 児 : 女児　第一子)。協力者は，調査者の知人や友人の紹介を通じ，研究への参加に承諾を得る事が出来た母子であった。

2-2. 調査期間

子どもが生後 6 ヶ月齢となった時点から 24 ヶ月齢となるまでの 19 ヶ月間，毎月，撮影を行った。撮影の際は調査者が各家庭を訪問したが，長距離の場合には SD カードの郵送によるやりとりによって，撮影は協力者にまかせた。

2-3. 観察方法

ひと月おきに，家庭を訪問しビデオカメラにより撮影を行った。絵本読みは日常生活に近い形をとってもらうため，「いつもと同じようにお子さんにお読みください」と教示した。また，子どもが絵本を嫌がる場合には撮影を中断した。カメラは母子から 1m ほど離れた場所に三脚を置き，母子の表情，絵本のページが映るようにカメラを設置して録画を行った。しかし，子どもがカメラのフレームから外れることもあるため，撮影方法はその場の状況に応じて変化させた。また，撮影中に子どもが絵本を嫌がり，泣くことが生じた場合には撮影を中断することとした。撮影の前後には時折，母子と調査者との間でのやり取りを行うこともあり，母親から子どもの様子や絵本への考えなどの情報を得た。

2-4. 選択された絵本

Table1 は，本研究にて用いられた絵本である。

Table 1 *用いられた絵本*

①がたんごとんがたんごとん	(6ヶ月)	作：安西水丸
②いないいないばあ	(7ヶ月)	作：瀬川康男
③たまごのあかちゃん	(8ヶ月)	作：かんざわとしこ
④きゅっきゅっきゅっ	(9か月)	作：林朋子
⑤おつきさまこんばんは	(10ヶ月)	作：林朋子
⑥くだもの	(11ヶ月)	作：平山和子
⑦コップちゃん	(12ヶ月)	作：中川ひろたか
⑧ぶーぶーじどうしゃ	(13ヶ月)	作：山本忠敬
⑨きんぎょがにげた	(14ヶ月)	作：五味太郎
⑩ピンポーン	(15ヶ月)	作：中川ひろたか
⑪おとうさん　あそぼう	(16ヶ月)	作：わたなべしげお
⑫ぞうくんのさんぽ	(17ヶ月)	作：なかのひろたか
⑬とっとことっとこ	(18ヶ月)	作：まついのりこ
⑭こぐまちゃんとぼーる	(19ヶ月)	作：わかやまけん
⑮ぎったんばっこん	(20ヶ月)	作：なかえよしを
⑯しろくまちゃんのほっとけーき	(21ヶ月)	作：わかやまけん
⑰うさこちゃんとどうぶつえん	(22ヶ月)	作：ディック　ブルーナ
⑱かおかおどんなかお	(23ヶ月)	作：柳原良平
⑲かばくん	(24ヶ月)	作：岸田衿子

絵本は調査者が選択した絵本，協力者が選択した絵本の 2 冊を毎月の撮影で用いた。調査者が選択した絵本は毎月異なるものであり，各月齢において理解していると思われる概念が現れている絵本を選択した 。

2-5. 分析指標

録画された映像はすべて文字化し，トランスクリプションを作成した。また，月齢においてどのような行動が存在したのかを検討するため，各行動のカテゴリー化を行った。それぞれの母子のトランスクリプションから共通する行動であると思われるものをまとめ，カテゴリーの命名を行った (Table2 参照)。行動カテゴリーはタイムサンプリング法 (1/0 サンプリング)にて出現回数をカウントした。その際，最初の 3 秒を記録時間，次の 3 秒を休止とした。一致率を算出したところ，$\kappa = .79$ という信頼できる値であった。不一致の箇所は，調査者

と第 3 者の間で協議し必要によって定義の修正などを行った。

2−6. 倫理的配慮

本研究では研究への参加の説明において，撮影データは調査者と指導教員以外が見る事はない旨，学会等で撮影データを使用する際には協力者に許可を求める旨や結果のフィードバック，また，子どもが絵本を嫌がることがあれば調査を中断する旨を伝えた。

2-7. カテゴリー

Table2 は，各行動カテゴリーとその定義を表したものである。カテゴリーの定義に関しては，本研究の調査対象となる月齢に近い子どもと母親の絵本場面を調査した先行研究のカテゴリーを参考とした。

Table 2 *使用されたカテゴリー*

カテゴリーの名称	定義	カテゴリーの使用例
【母親のカテゴリー】		
指さし	人差し指を使って絵を指し示す行動。	ex. M「うさこちゃん＜うさこちゃんを指さす＞」
演出	絵本を読むときに効果音を出したり，絵を動かすなどの演出的な要素を含む行動。	ex.M「びゅ〜ん＜ひざを揺らす＞」 M「はわわわわ＜絵のようにあくびをしてみせる＞」
発声	子どもが注意をそらした直後に発せられる声かけ。子どもが絵本とは異なる方向を見ているときに，発せられた状況説明や名称付け，質問は注意喚起的発声として捉えることとする。	ex. M「(子どもが目をそらしている状態で)わあー。 ほら，みてごら〜ん。おっきいよ。」 M「見て，Coちゃん。」
説明	子どもが絵本を見ている，興味を持って接触している状態で発せられる絵本の中の名称付けや状況説明。子どもに情報を与える行為として位置づける。	ex, M 「あ，ワニさんもだよ＜Coの顔を見ながらワニを指さす＞ワニさん，ワニさん。」
質問	子どもが絵本を見ている，興味を持って接触している状態で発せられる絵本に関連した事柄の質問。ただし，子どもの気持ちを代弁するような確認の意味での質問はこれに含まない。	ex. M「お腹に袋ありますか〜？＜Coの顔を見る＞」 M「うん、教えて。 どのきんぎょさん？」
【子どものカテゴリー】		
注目	絵本を見ている状態。子どもの頭や目が絵本のヘリに並び，2秒以上その状態を保った時，注目が行われたとする。	
非単語的発声	喃語のように言葉として成り立っていない発声。	ex. Co「ばっば」「あーあーあー」
発話	有意味語とみなされる発声(指示語を含む)。はっきりと発音されていなくとも，前後の文脈を考え単語に近い発声が出現したと思われる場合にこれに含む。	ex. Co「マーマ，パーパ」「これ，これ＜ボートを指さす＞」
内容的働きかけ	絵を見て手のひらで叩く，顔をつけるなどの絵に対して興味を持って接触していると思われる行動。	ex.Co 「でしゃ＜コアラを手で触る＞」
指さし	絵本の中の対象を指さす行動。主に人差し指で行われるが，第三者(ここでは母親)に対象の存在を伝えようとして手のひらで絵を叩いた場合などはこれに含む。この点については前後の文脈を見て判断する。	ex. Co「＜大きいボールを指さす＞」 Co 「 (Mのきんぎょを教えてほしいとの問いにたいして)Co:だっだっだ＜本いっぱいのきんぎょの絵を手の平で叩く。」
模倣	登場人物の行っている行動，母親の行っている行動，発話を見る、聞くなどして真似をする行動。母親の接触無しに，自発的に発生した場合を評価する。	ex. M「こらあっ。＜怒ったお日様の声真似をする＞」 Co「だあっ＜絵本を見ながら笑顔で声真似をする＞」
絵本への働きかけ	絵本をかじる，抱えるなどの絵本そのものに対する働きかけ。	ex. Co「＜絵本の端をつかもうとする＞」

注. ここでは母親はM，子どもをCoとして記述する。

参考とした先行研究は Adriana & Marinus (1997)，Senechal & Cornell & Broda (1995) であった。

母親のカテゴリーである「指さし」,「演出」,「質問」,「説明」は Adriana & Marinus (1997) の「指さし (Pointing) 」,「反応の引き出し (Evoking response) 」，「言及 (Referencing) 」カテゴリーを参考に，また Senechal ら (1995) の「説明 (Elaboration) 」，「質問 (Question) 」を参考とした。

子どもの「注目」行動については，Senechal ら (1995) を参考とし，子どもの頭や目が本のへりに並び，2 秒以上その状態が続いた場合を「注目」とした。「絵本への働きかけ」，「指さし」については Adriana & Marinus (1997) の「本上の活動 (Acting Upon Book) 」，「ページめくり (Page Turning) 」，「反応 (Responding) 」のカテゴリーを参考とした。「非言語的発声」は Senechal ら (1995) の「子どもによる言語 (Child vocalization) 」を参考とした。「子どもによる言語」は，非言語的乳幼児によって作られる言語，本のイラストについてのラベル付けに使用される単語，質問への反応を含むカテゴリーであった。

3　結果と考察

3-1. 行動の初出現月齢からみた母子相互行為の変遷

Tabel3 は，各母子における行動の初出現月齢を表にまとめたものである。それぞれ，M が母親，Co が子どもの行動を指す。ここでは，本研究の目的に沿い，母親の演出行動と質問行動を中心に行動の初出現月齢を記すことで，演出行動と質問行動に関連する子どもの行動について検討する。

Table 3 A, B, C, D, E児 *母子における行動カテゴリーの初出現月齢*

カテゴリー	A児	B児	C児	D児	E児
6～9ヶ月齢の期間に出現					
演出（M）	7ヶ月	6ヶ月	7ヶ月	6ヶ月	6ヶ月
非単語的発声（Co）	7ヶ月	9ヶ月	7ヶ月	8ヶ月	7ヶ月
内容的働きかけ（Co）	6ヶ月	9ヶ月	8ヶ月	8ヶ月	6ヶ月
11ヶ月齢以降に出現					
質問（M）	12ヶ月	17ヶ月	14ヶ月	12ヶ月	12ヶ月
指さし（Co）	11ヶ月	13ヶ月	15ヶ月	13ヶ月	13ヶ月
発話（Co）	12ヶ月	20ヶ月	17ヶ月	15ヶ月	未出現
模倣（Co）	12ヶ月	15ヶ月	18ヶ月	15ヶ月	未出現

注．Mは母親、Coは子どものカテゴリーである

Table3 を見ると，母親の演出行動と子どもの非単語的発声，内容的働きかけは，5 組の母子によってそれぞれ初出現月齢に差は見られるが，子どもが生後 6～9 ヶ月齢の期間に出現が確認された。各母親の演出行動について見ると，B, D, E 児の母親においては 6 ヶ月齢から，A, C 児の母親においては 7 ヶ月齢からの出現が見出された。子どもの行動を見ると，非単語的発声と内容的働きかけは，B 児は 9 ヶ月齢，D 児は 8 ヶ月齢にそれぞれ出現し，その他 A, C, E 児においては同様の月齢に出現は見られなかった。しかし，その初出現時期の差は 1 ヶ月ほどであった。

また，母親の質問行動と子どもの指さし，発話，模倣は，最も行動の出現が早かった子どもで 11 ヶ月齢に出現が確認された。母子により差はあるが，母親の質問行動は 17 ヶ月齢までには全ての母親において出現が認められた。子どもの指さし，発話，模倣を見ると，全ての子どもにおいて最も早期に出現した行動は，指さしであった。発話と模倣については，A 児は 12 ヶ月齢，D 児は 15 ヶ月齢にそれぞれ出現が確認された。B 児においては模倣の出現から 5 ヶ月後に発話が確認された。しかし，C 児においては発話の出現の 1 ヶ月後に模倣が確認されたことから，発話と模倣の出現には順序性がないことが示唆された。

以上の結果では，母親の演出と子どもの内容的働きかけ，喃語が主体の相互行為から，母親の質問行動，子どもの指さし，発話，摸倣の出現といった多様化した相互行為への変化が，全ての母子において見られた。特に変化が早い母子では 11 ヶ月齢にその様子が表れ始めた。母親は質問行動という子どもの反応や言葉を引き出す行動を行い始め，子どもは指さしや発話，模倣といった子ども自身が絵本の内容に理解を示し，母親と絵本を共有しようとする意図を持つと考えられる行動が表れた。Tomasello (2006) によれば，九ヶ月革命と言われる時期が存在し，子どもは生後 9 ヶ月齢を境に三項関係 (triad relationship)を成立させるという。三項関係とは子どもと大人，そしてその他の事物によって生じる三角形であり，子どもは何らかの事物を介して大人とコミュニケーションを取ることができる。本結果では，母親の質問行動，子どもの指さし，発話，摸倣の出現する時期が絵本の内容を通じての母子相互行為が展開されてきた時期であることが推測される。そして，生後 6 ヶ月齢からの子どもの行動に指さし等が出現していない早期の絵本場面では，子どもはまだ絵本の内容を介して母親とコミュニケーションを取る段階には至って居ないことが考えられる。しかし，生後 6 ヶ月齢から子どもは絵に興味を持って喃語を発し絵に触れることを行い，母親は主に擬音語やジェスチャー，感情を込めたセリフの言い回し等の行動を用いている特徴が認められた。子どもはまだ，絵本の内容を介して母子とのやり取りを行うことが困難な月齢であるが，絵本読みという場において母親は演出行動を用いることで子どもを喜ばせようと働きかけ，子どもは非言語的行動を用いて絵本へ興味を持って働きかけていたことが考えられた。三項関係が成立していないと思われる月齢においても，母親の演出行動の出現や子どもの非言語的な絵本へのアプローチが認められる等，早期の絵本読み空間における特有の相互行為が展開されていたことが見出された。

では，絵本読みでの母子相互行為に変化が生じる月齢を境として，母親の演出行動と質問行動は子どもの行動とどのように関連し合い，相互行為を構築していくのか，それぞれの行動出現率から検討を行う。

3-2. 行動出現率からみた母親の演出行動，質問行動と子どもの行動との関連

ここでは，最も相互行為の変化が早く，観察全体を通して母親の演出行動に高い出現率が示された A 児母子のデータを提示した。Figure1 は，それぞれ Table3 にて同様の初出現月齢であった母親の演出行動と子どもの非単語的発声，内容的働きかけの行動出現率を月齢ごとに算出し ((各カテゴリーの出現コマ数 ÷ 全母子において最長の絵本読み時間のコマ数) × 100) ，グラフ化したもの，Figure2 は母親の質問行動と子どもの指さし，発話，模倣の出現率をグラフ化したものである。

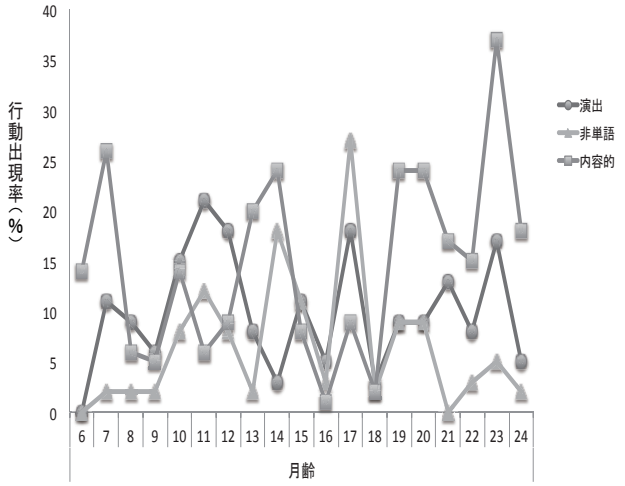

Figure1. *A児母子における各月齢の行動出現率*
（母親の演出行動と子どもの非単語的発声、内容的働きかけ）

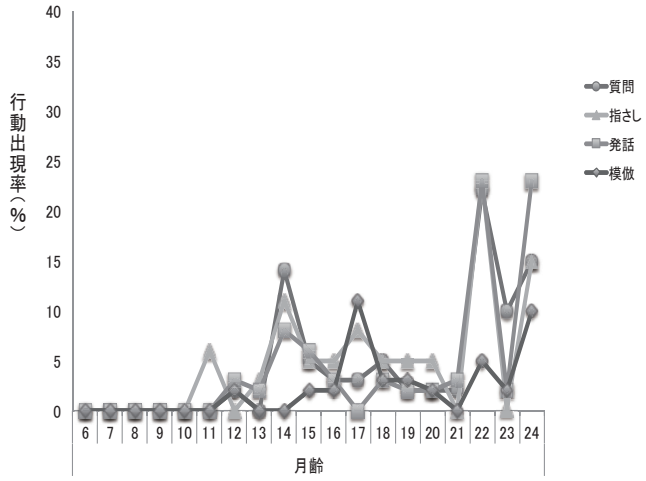

Figure2. *A児母子における各月齢の行動出現率*
（母親の質問行動と子どもの指さし、発話、模倣）

Figure1 を見ると，子どもは 6 ヶ月齢から絵を触る等の絵本への働きかけを行い(内容絵的働きかけ 14%)，7 ヶ月齢にはさらにその出現率が増加する(内容的働きかけ 26%)など，絵本への興味が高まって行く様子が認めら

れた。また，母親の演出行動と子どもの非単語的発声，内容的働きかけが全て出現し始めた 7 ヶ月齢以降，母親の行動と子どもの行動の出現率は互いに近い出現率を示す箇所が多く見られ，各月齢において類似した出現率の変化を見せていた。例えば，8 ヶ月齢(母親の演出：9%； 子どもの内容的働きかけ：6%)や 9 ヶ月齢(母親の演出：6%; 子どもの内容的働きかけ：5%)など，また，A 児において相互行為が変化していたと考えられるおよそ 11 ヶ月齢以降では，15 ヶ月齢(母親の演出: 11%; 子どもの非単語的発声: 11%; 内容的働きかけ: 8%)や 19 ヶ月齢と 20 ヶ月齢(母親の演出: 9%; 子どもの非単語的発声: 9% (両月齢共))に，その様子が顕著に表れている。

実際の事例を見ると，子どもの行動が多様化する以前 (11 ヶ月齢前) では，8 ヶ月齢に「たまごのあかちゃん」を読み，大きな恐竜の絵が表れた時に子どもは喃語を発しながら両手を広げて恐竜を触ろうとする等，楽しさを伴った絵本への働きかけを行う様子が見られた。また，母親はセリフの語尾を引き延ばす演出が認められた。絵本「きゅっきゅっきゅっ」を読んだ 10 ヶ月齢では，母親は登場人物の行動と同じ行動を A 児に実践する様子が見られた(ex. 口を拭いてあげる)。しかし，子どもが絵本の情報について母親に伝えようとする場面は認められなかった。また，演出行動は子どもが目を逸らした時などの注意喚起として用いられることが多く，母親の演出行動によって注意を引きつけられた子どもが絵本に興味を示し，絵を触り喃語を発する様子が見られた。

これらの結果からは，一般的に事物を介してのやり取りが困難と言われる 9 ヶ月齢前の月齢において，子どもの注意は絵本または母親への一方向であること，母親の演出行動は主に子どもへの注意喚起の役割を持っていたといえる。しかしながら，Figure1 や事例の結果からも見られるように，絵本読みという空間において母子は様々な行動を表している。子どもは絵に対して興味を引かれ，時折笑顔を見せて絵本を見る。そして母親は演出という楽しさを含んだ方法を用いて子どもを絵本の世界へと導いていき，また子どもは絵本への働きかけを行う。このようなやり取りの様子は個人差があるものの，他の母子においても認められたものである。佐藤(2007)は，感情によるつながりを基礎にした関係というものが相互作用の背景にあり，相互作用を規定していると述べている。また，基本的な信頼や，対話することで何かが生まれてくる事に期待を寄せられないような関係や対話の場では，対話は始まらず，対話そのものへの動機が生まれてこないとも述べている。ここでの母親の演出行動と子どもの非言語的発声，内容的働きかけは，一見，母親と子どものやり取りがそれぞれ一方向のものとして捉えられるが，子どもが母親との絵本を介した対話を行う動機を見出すために，親と子が基本的信頼を構築する重要な相互行為が絵本読み空間に生じていたと考えられる。

絵本読みでの相互行為に変化が生じた月齢以降 (A 児では 11 ヶ月齢以降)においても，母親が演出を用いて情緒的な母子相互行為を築いている様子が表れていた。Figure1 の説明にもあったように，母親の演出行動と子どもの非言語的発声，内容的働きかけの出現率の変動は類似した変化を見せていた。さらに事例では，１６ヶ月齢の絵本「ねんね」において，あくびをする登場人物の真似を子どもにさせようと，子どもの口に軽く手を当て，あくびの真似をさせる母親の姿と，笑顔であくびの真似を楽しんでいる子どもの姿が見出された。このように，子どもが絵本を介して母親と対話が行えるようになった段階においても，母親の演出行動は親子の情緒的な絵本読み空間を直接的に作り出す役割を担っていることが考えられる。

続いて Figure2 では，12 ヶ月齢以降，母親の質問行動と子どもの指さし，発話，模倣が各月齢において類似した出現率の変化を表している様子が見られた。例えば, 12 ヶ月齢(母親の質問: 2%; 子どもの発話: 3%; 模倣: 2%)や 14 ヶ月齢(母親の質問: 14%; 子どもの指さし:11%; 発話: 8%)などである。さらに 22 ヶ月齢(母親の質問: 22%; 子どもの指さし: 23%; 発話: 23%; 模倣: 5%)では，特に母親の質問と子どもの指さし，発話において最も高い出現率が認められ，またそれぞれ近しい出現率が認められた。

出現率からは，母親の質問に対して子どもが応答していると捉えられる。しかし，実際の事例を見ると，母親の質問は子どもの応答を得られない場合が多い。例えば，14 ヶ月齢の絵本「きんぎょがにげた」では，絵本の中のきんぎょの行方を子どもに尋ねる場面が多くあったが，子どもが母親にきんぎょの場所を示したのは 2 回ほどであった。ここから，子どもは母親と絵本を介して相互行為を行えるようになったと考えられるが，まだ子ども自らが絵本を介した言語的な相互行為を行うことが難しいと想定される。では，母親の質問と子ども

の指さし，発話，模倣の出現率になぜ類似した変化が見られたのか。それは，母親の質問に子どもが応答したのではなく，子どもが絵本の内容に関連した発話や指さしを行った後に母親が質問を行ったためと考えられる。事例を見ると，22 ヶ月齢の「もりのおふろ」では，子どもが自分の知っている動物を指さし，絵本に向かって名前を言うことで，母親は異なる動物を指さして質問を始める様子が見られた。さらに，14 ヶ月齢の「きんぎょがにげた」では，一度質問に子どもが応答を示すことですぐに，類似した質問(ex. 今度は(きんぎょは)どこに行った？)を繰り返す母親の姿が見られた。

上記のような質問行動は言葉を覚えてほしいとの母親の教育的側面が表れているとも考えられる。しかしながら，同時に情緒的側面も併せ持っていることが想定される。それは，子どもが応答した後の母親による肯定や賞賛である。子どもが母親の質問に適切な応答(ex. きんぎょの場所を指さす)を行った時，母親は声のトーンを高くし「そうっ，そうだよっ」と賞賛を交えた肯定を行うことがあった。このような行動は，子どもに喜びを与え，楽しい絵本読み空間が構築されるに当たって重要な役割を担っていると想定される。また，他の母子においても同様の絵本で，きんぎょを指さした子どもへ「いたあ〜」と高いトーンで喜ぶように返す母親の姿も見出された(C 児 : 20 ヶ月齢)。従って，行動が多様化し，様々な相互行為が展開している月齢であっても言語表出が未成熟で，自ら絵本について母親に働きかける事がまだ困難な子どもにとって，母親の質問行動は，子どもが言葉を獲得していく上での足場といった教育的な役割を担い，さらにその後の肯定により情緒的な相互行為へ繋がるきっかけともなり得ることが考えられた。

ここまで，母親の演出行動，質問行動の母子相互行為促進における有用性について提示した。特に演出行動は情緒的な相互行為促進へ大きな影響を及ぼすことが考えられ，また質問行動の後の賞賛を交えた肯定も情緒的な相互行為促進に影響を及ぼす可能性が考えられた。では，母親は主に情緒的側面を持つ演出行動と教育的側面を持つ質問行動をどのように使い分けているのか，検討を行った。

3-3. 母親による演出行動と質問行動の使用場面の違い

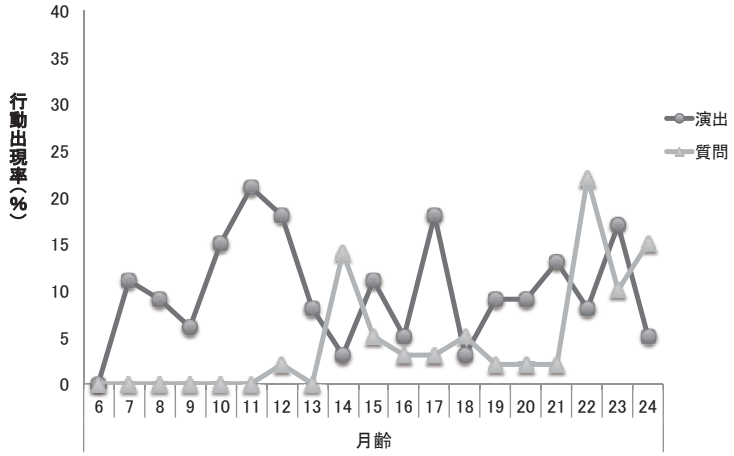

Figure3. *A児母親の月齢による演出行動と質問行動*

Figure3 は，A 児母の演出行動と質問行動の出現率を月齢ごとにグラフ化したものである。グラフを見ると，A 児母子の相互行為が多様化し始めた 11 ヶ月齢以降，母親の演出行動と質問行動が同様に高い出現率を示す月齢は少ないことが明らかとなった。演出行動の出現率が高い時には質問行動の出現率が低く，逆に，質問行動の出現率が高い時には演出の出現率は減少しいていた。例えば，14 ヶ月齢では母親の質問は 18%であるのに対し，演出行動は 3%であり，また 22 ヶ月齢と 24 ヶ月齢にも同様の結果が得られた(演出行動: 8%，5%; 質問行動: 22%，15%)。さらに，演出の出現率が高い 17 ヶ月齢や 23 ヶ月齢(演出行動: 18%，17%)には，質問行動が減少していることが明らかとなった(質問行動: 3%，10%)。

事例を見ると，質問行動が多かった 22 ヶ月齢時に「もりのおふろ」を読んだ時，子どもが様々な動物に興味を持って指をさし，「ぞうさん」と呼びかける中，母親は子どもが答えられそうな動物や車に指をさし，「これは？」と名称を聞く質問を行った。子どもは答えを間違える事もあったが，正確な名称を答える事が多かった。子どもが名称を言ったり，質問に応答した後，母親は質問を行っていた。逆に演出行動が多く見られた翌 23 ヶ月齢には，「かおかおどんなかお」を読み，「この顔がいいの？」と母親が質問し，子どもがうなずく場面が見られたが，子どもが絵本の顔にコメントをすることはなかった。そのようなやり取りの後，母親は主に

質問ではなく，絵本の顔の表情に合わせての感情を込めた読み方を行った(ex. 怒った顔→怒った調子で言う)。そして，「いたずらなかお」の時，少し声色を低くした感情を込めて「いたずらなかお」と読みながら，子どもの顔を覗き込むことを行い，子どもは笑顔で母親へ笑顔を向け，再び絵本へと向き直していた。

ここでは，母親が子どもを喜ばせようとする演出行動を用いた情緒的な相互行為を中心としながらも，質問行動によって情報を引き出そうとする言語を交えた相互行為に子どもを参入させようとする様子が見られた。情緒的側面を基礎としながらも子どもの様子を見て教育的側面を取り入れる母親の姿が見出された。母親は，先に述べたように質問と肯定を繰り返して子どもから反応を引き出そうとする。しかし，その質問は常に反応を得られない場合，また，質問により子どもが楽しげに応答することがない場合等，子どもからの応答を得る事が困難と判断した時，母親は演出行動を増やし，6〜10 ヶ月齢に生じるマザリングのような相互行為を中心に話を進めることが考えられた。しかし，子どもが母親の質問に適切な応答を行うことが多い時，母親は情緒的な相互行為を基本としながらも教育的な側面を表していく等，子どもの様子を見ながら演出と質問を使い分けていることが想定される。

4　まとめ

本研究では，一般的に絵本を介してのやり取りが困難と言われる 9 ヶ月齢前の月齢であっても，絵本読みという空間において母子の相互行為は多様な展開を示していくことが見出された。また，母親の演出行動は子どもとの楽しげな空間を作ろうとする情緒的な相互行為を構築する役割を担っている事，母親の質問行動は言語を交えた対話に子どもを参入させようとする教育的側面をもった相互行為を構築する役割を担っていることが考えられた。上記の結果は A 児母子だけではなく，出現率の差はあるものの他の 4 組の母子においても同様の傾向が認められた。例えば，靴が主役の絵本が読まれた B 児母子(18 ヶ月齢)では，母親は子どもの足に絵本の靴をくっつける演出を行い，母子共に笑い合った。そして，再び母親が「はい，くっく〜」と言って絵本を子どもに近づけると子どもは自ら絵本に足をくっつけ，再び母子で笑い合うという場面が見られた。このように，実に様々な形での演出をきっかけに相互行為は展開していく様子が認められた。しかしながら，母子によって基本的な絵本読みスタイルは異なる。演出をきっかけとした相互行為の展開は母子によって様々であり，家庭内の背景(ex. きょうだいの有無)によって話題も変化する。従って，他の絵本読みスタイルを持つ母子に関しても相互行為の実態を明らかにしていくことが今後の課題といえる。今後は，さらに各母子に対する研究を進め，様々な母子の絵本読みスタイルを明確にすること，また，早期の絵本読みにおける演出や喃語が中心となった特有の相互行為の展開を詳細に検討していくことにより，親子の情緒的交流の促進に役立つ情報が提示できると考えられる。

引用文献

Adriana, G. Bus. & Marinus, H. van. Ijzendoorn. (1997). Affective Dimension of Mother-Infant Picturebook Reading. *Journal of School Psychology,* **35**(1), 47-60.

秋田喜代美・無藤　隆. (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. *教育心理学研究*, **44**, 109-120.

石崎理恵. (1996). 絵本場面における母親と子どもの対話分析：フォーマットの獲得と個人差. *発達心理学研究*, **7**(1), 1-11.

村瀬俊樹・マユーあき・小椋たみ子・山下由紀恵・Philip S Dale. (1998). 絵本場面における母子会話 ： ラベリングに関する発話連鎖の分析. *発達心理学研究*, 9(2), 142-154.

Ninio, A. & Bruner, J. (1978). The achievement and antecedents of labeling. *Child　Language,* **5**, 1-15.

Senechal, M., Cornell, E. H. & Broda, L. S. (1995). Age-Related Differences in the Organization of Parent-Infant Interactions During Pictuire-Book Reading. *Early Childhood Research Quartely*, **10**, 317-337.

菅井洋子. (2012). *乳幼児期の絵本読み場面における共同活動に関する発達研究–共同注意の指さしからの探求–*. 東京：風間書房.

外山紀子. (1989). 絵本場面における母親の発話. *教育心理学研究*, **37**(2), 151-157.

Tomasello, M. (2006). *心とことばの起源を探る　文化と認知* (大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本田　啓, 訳). 東京：勁草書房. (pp.80-81). (p.113). (Tomasello, M. (2006). The cultural prigins of human　cognition.Cambridge: Harvard University Press)

佐藤公治. (2007). *対話の中の学びと成長*. 東京：金子書房. (p.14).

佐藤鮎美・内山伊知郎. (2012). 乳児期における絵本共有が子どもに対する母親の働きかけに及ぼす影響 : 絵本共有時間を増加させる介入による縦断的研究から. *発達心理学研究*, **23**(2), 170-179.

関根佐也佳. (2013). 乳児期における絵本読み場面の母子相互行為の変化 ： 縦断的観察による分析. 人間文化創成科学論叢, **15**, 221-229.

謝辞

本研究において，長期にわたりご協力してくださいました母子の方々とそのご家族に大変感謝申し上げます。また，研究についてご指導頂きました文京学院大学の上村佳世子先生とお茶の水女子大学の刑部育子先生に深く御礼申し上げます。